

原著

金亀山福王寺が所蔵する『小部類集』に 含まれている「律蔵目録」について： 近世後期の律理解

岸野良治*

京都薬科大学 一般教育分野

學如が「根本説一切有部律」の実践道場とした福王寺には、同律に深く関わる文献が13点現存するようである。その一つである『小部類集』は、八つの小篇テキストからなるテキスト集成である。その第一番目の「律蔵目録」には、彼ら近世後期の「根本説一切有部律」を重視した者たちにとって重要な律テキストが列挙されており、そこからは、彼らの律理解に関する様々なことが窺い知られる。例えば、彼らが同律の翻訳者である義浄（635–713）の著作も重視していたこと、同じ説一切有部の律である『十誦律』を、「根本説一切有部律」の傍流であり内容上も同種のものとして捉えていたこと、更には『薩婆多部毘尼摩得勒伽』を両律に通じるテキストとして捉えていたことなどである。これらの理解の中には、近代仏教学の成果にも通じる精度の高いものもあり、彼らの見識の高さが窺い知られる。

キーワード：學如、福王寺、『小部類集』、「根本説一切有部律」、戒律

受付日：2022年2月24日、受理日：2022年4月7日

緒言

紀元前5世紀頃に、インド亜大陸において誕生した仏教は、その後、通商路に沿って各地に広がり、さらにはインド亜大陸を離れ、概して「パーリ語仏典文化圏」（スリランカや東南アジア諸国）、「漢語仏典文化圏」（中国・朝鮮半島・日本）、「チベット語仏典文化圏」（チベット・ブータン・モンゴル）というように、仏教テキスト

をどのような言語で理解・伝承するかによって大別される三つの異なる仏教文化圏に伝わった¹⁾。この仏教の伝播において重要な役割を果たすのが、律（Skt. vinaya）と呼ばれる仏教テキストである。

「仏教の伝播」は、厳密には、仏（Skt. buddha：ブッダ）、法（Skt. dharma：教え）、僧（Skt. samgha：正式な出家修行者の集団。日本では「僧団」と呼ばれることも少なくない²⁾。本稿においても「僧団」という用語を用いる）の「三宝（Skt. tri-ratna）」全てが伝わることで初めて成立する³⁾。このうち、「仏」や「法」の

* 連絡先：

〒607-8414 京都市山科区御陵中内町5
京都薬科大学 一般教育分野

伝播は、比較的容易であると言えるかもしれない。というのも、ブッダの具象物や概念、或は、仏教の教義を説くもの（者・物）が、かの地に渡り、そしてそれらが受け入れられたならば、伝播が成立したと見なしうからである。一方で、「僧」の伝播というのは容易ではない。「僧」の伝播とは、単に、かの地に出家修行者が赴き、彼らが受け入れられることを指すのではなく、そこで彼らが、一般に「授戒／受戒」と呼ばれる儀式（本稿では「受戒」と表記する）を執行することによって一定数以上の正式な出家修行者を輩出し、その結果、そこに新たな僧団が樹立されることを指すからである。新僧団の樹立は数多くの要件を満たさねばならず、容易には実現しない。かの有名な鑑真（688-763）は、危険を冒し失敗を重ねながらも、はるばる中国から日本へと海を渡ってやってきたが、それは、律に基づく正式な「受戒」を日本で行うためであったことがよく知られている⁴⁾。

律には、この受戒の執行方法や規定がブッダの直説として詳細に説かれている。この執行方法や規定を守ることなく執行された受戒は、ブッダの言葉に従っていないことになるため、少なくとも原理上は有効性をもちえない。したがって、律なきところには、正式な受戒は存在せず、「僧」は存在しえず、三宝は揃わない。裏を返せば、仏教が伝播した地域には、必ず律テキストも伝わっている。こと漢語仏典文化圏に話を限定すると、受戒の執行方法の詳細を含むまとまった形の律テキストが、初めてインドより伝わったのは、5世紀になってからのことである。一挙に四つの律テキストが漢語に訳された。それらを翻訳年代の順に挙げると『十誦律』(404-405年)、『四分律』(410-412年)、『摩訶僧祇律』(416-418年)、『五分律』(423-424年)である。これらの律テキストは、中国における伝承によれば、それぞれ古代インドにおいて「説一切有部」(Skt. Sarvāstivādin)

「法蔵部」(Skt. Dharmaguptaka)、「大衆部」(Skt. Mahāsāṃghika)、「化地部」(Skt. Mahīśāsaka)という名の四つの異なる仏教グループ（日本では、概して「部派」と呼ばれる）によって伝持されていたと伝えられているが、内容が極端に大きく異なるわけではない。そのためか、これらのテキストが中国に伝来した当初は、四者の中で最も翻訳が新しい『五分律』以外の三者が、都市によってまちまちに活用・研究されたようである⁵⁾。ところが、遅くとも『四分律』の注釈を数多く著した道宣(596-667)の頃までには、諸律の中でも『四分律』が、最も一般的なテキストになり、そしてその後も『四分律』の優勢は揺らぐことはなかったようである⁶⁾。しかしながら、8世紀に、その『四分律』の優勢に挑んだ僧がいた。中国からインドに渡り、ナーランダー僧院に滞在した義浄(635-713)である。それを初めから意図して旅に出たかどうかは必ずしも定かではないが、義浄は、インドよりいわゆる「根本説一切有部律」という別の律テキストを中国に持ち帰るとともに、自ら翻訳に深く関わって公刊することで、その重要性を身をもって主張することになり、結果的に『四分律』の依用に疑義を挟むことになったのである。実際、彼は、自著『南海寄帰内法伝』という旅行記のなかでも、中国における出家修行者のあり方を、本場インドのものとは異なるものとして繰り返し批判し、そして自身の持ち帰った律典にこそ、その本場インドの出家修行者のあるべき姿が説かれていることを強く示唆している⁷⁾。だが、残念なことに、義浄の挑戦は中国では実を結ばなかったようである。中国において、彼が将来した「根本説一切有部律」を実際に用いて出家生活を送った者たちが数多くいたことを示す記録、あるいは、その新たな律典の出現により『四分律』の優勢が揺らいだことを示唆するような資料は、あまり見つかっていないことが知られているのである⁸⁾（ただし、そこに含

まれている仏教説話は、中国の文学界に大きな影響を与えたことが指摘されている⁹⁾。

しかしながら、その義浄の願い、すなわち、「根本説一切有部律」の広い活用・深い研究は、彼の死後 1000 年以上の時を経て、極東の日本において叶うことになる。日本においても、律テキストに関しては、道宣の孫弟子と言われている鑑真が、753 年に中国から来日し、『四分律』に基づく正式な受戒を初めて実施して以降、長らく広く『四分律』が一般的であった。ところが、江戸時代後期に至って「根本説一切有部律」が遽に脚光を浴びるようになる。近世中期から各宗に拮がった戒律に立ち返ることを主張する宗教運動の中で、真言宗では、高野山の妙瑞(1696-1764)や密門(1719-88)、安芸福王寺の學如(1716-73)らが、高祖空海(774-835)が『三学録』において真言宗所學の律テキストとして「根本説一切有部律」を挙げていることに着目し、それまでに広く普及はしていたものの学術的にも実践上もほとんど顧みられることのなかった同律の研究につとめ、同律に基づいた儀礼・出家生活を宣揚するに至ったのである¹⁰⁾。妙瑞や學如らの運動や主張の概要は、近代仏教学(「明治期にもたらされたヨーロッパの人文科学における文献学や歴史学等に基づく仏教研究の方法で、その影響を受けて発展した日本の仏教研究のあり方に対する名称¹¹⁾」)においても知られてはいるものの¹²⁾、未だその詳細は充分には明らかにされておらず、また、彼らが「根本説一切有部律」そのものをどのように読み、理解していたかという点に至っては全くと言っていいほど究明されていない。その理由としては、何よりも、彼ら江戸時代の学僧たちが著した一次資料へのアクセスが困難だということが挙げられる。その多くは現存が確認されず、現存が確認されるものでも、国内の図書館に貴重書として所蔵されているか、寺院の経蔵に深々と安置されているため、閲覧や実見が容易では

ないのである。

調査

以上のような背景のもと、筆者は、サンスクリット・チベット語訳・義浄訳で現存する「根本説一切有部律」を解説するかたわら、江戸期の「根本説一切有部律」宣揚運動に関わった学僧たちの著作に焦点をあて、その現存を確認すること、そして現存するものに関しては、その概要を明らかにすることを自身の研究課題の一つとしているが、本稿では、福王寺(広島市可部町)に現存する関連資料についての調査結果の一つを報告する。福王寺は、學如が住職を務めた(第26世)寺院である。彼が宝暦10年(1760)に、そこを「根本説一切有部律」の修行道場とすると、同律に基づく修行生活を実践する場として、各地から数多くの出家修行者が集まり、「有部の三僧坊」の一つとして隆盛したことで知られている¹³⁾。その隆盛ぶりは、今も残る広大な敷地からも窺い知られるが、残念ながら、安永8年(1779)に大火災に見舞われ、すぐに再建されるも、天保12年(1841)にも火災がおこり、さらには、昭和に至っても2度の火災(1946年と1977年)に見舞われており、結果、諸資料の多くが失われてしまっている¹⁴⁾。筆者の調査においても、僅かに計13点の関連文献を確認することができたにすぎず、それらは1987年に稲谷祐宣が福王寺所蔵の學如関連の資料として報告している13点に一致している¹⁵⁾。おそらく、これ以上の資料は福王寺には現存していないのであろう。各々のテキストに関する書誌情報の簡潔な概要は、その稲谷の報告に譲るとして、本報告では、その中の『小部類集』(上下2冊)という外題の比較的小さなテキストに焦点をあてる。後述するように、この『小部類集』は、八つの小篇テキストから成るオムニバ

ス形式の文献であり、その一つである「恭答亀龍之常塔上人」という首題が付せられたテキストについては、佐竹隆信が、それを——何故かはよく分からないが——『真言八祖有部受戒問答』と呼び変え、その翻刻を發表しているものの¹⁶⁾、それ以外の七つについては、管見の限り、現代の研究者による重点的な研究成果は存在しない。本稿では、その点を踏まえ、また与えられた紙数を勘案して、特に『小部類集』の最初の「律蔵目録」という短いテキスト（総じて4丁）をとりあげ、その全貌を翻刻および影印を通じて提示するとともに、その内容の考察を通じて江戸期の学僧たちの律理解ないしは「根本説一切有部律」理解の一端を示す。

考察

1) 『小部類集』について

福王寺が所蔵する『小部類集』は、徳田明本の『律宗文献目録』においても「小部類集上下」として挙げられており、説明として、學如の著した「小論文集」の「写本」と記されている¹⁷⁾。また『佛書解説大辭典』においても¹⁸⁾、『国書総目録』[1989-91]においても¹⁹⁾、その著者や内容、それが写本であるか版本であるかという点は触れられていないものの、『小部類聚（しょうぶるいじゅ）』というタイトルの「二卷本」のテキストが、「京都東寺専門学校」ないしは「種智院」（いずれも現在の種智院大学）に所蔵されていることが記されている。種智院大学の図書館に問い合わせたところ、『小部類聚』の行方は不明であるという回答を得たため、その詳細は知られず、またそれと福王寺所蔵の『小部類集』との比較もできていないが、おそらく同一のテキストであろう。

筆者が福王寺において実見した『小部類集』

は、上下2冊に分かれており、いずれも半紙本サイズ（縦約23.5cm 横約17cm）の線装本（袋綴）である。それぞれの表紙には、左側に「小部類集上」「小部類集下」という題簽が貼られており、また右側には「[㊦]學如記」「不動院」と記された二つの脇方簽が貼られている（[㊦]は朱字）。この「不動院」という脇方簽を素直に解する限り、この『小部類集』は、もともと福王寺ではなく、^{ふどういん}不動院（広島市東区にある真言宗別格本山の寺院）に所蔵されていたのであろう（なお付言すると、「上」「下」ともに最初の1丁目に所蔵印と思わしき、漢字四字からなる朱印が捺されているが、筆者には判読できない）。その内容は、八つの小篇テキストから成り、その意味においては、確かに徳田の叙述する通り「小論文集」と呼ぶに相応しい。「上」の紙数は総じて33丁であり、「律蔵目録」(4丁)、「五部罪名」(2丁)、「四律大科」(8丁)、「尼師但那」(5丁)、「有部律名目」(8丁)という首題が付せられた五つの小篇テキストから成る。一方、「下」は総じて48丁であり、「恭答亀龍之常塔上人」(17丁)、「戒名義」(22丁)、「異部大綱」(6丁)という首題が付せられた三つの小篇テキストから成る。またその「上」「下」の両者ともが、版本ではなく写本であることも徳田が述べている通りである。「上」においては、「五部罪名」と「有部律名目」の後に、享和二年(1802)の四月に、等淳という僧によって筆写されたことが明記されており（享和二年四月上旬_深恵師之御本紙二而惡筆書寫之畢 求寂等淳）、また裏表紙の裏側に記載された奥付に相当する一文の中にも、それとほぼ同一の一節が含まれている（右以上 四箇之目録雖各別に今略為一本矣 兩度校合了 享和二年四月四上旬_深恵師之御本紙_而乍惡筆謹而書寫之畢 桑門等淳）。また「下」においても「異部大綱」の後に、もともとは深恵という僧侶が天明八年(1788)の十一月下旬に筆写し（天明八申年

十一月下旬_ニ書写之畢 桑門深恵_{春秋十六才}), 続いてそれを等観という僧侶が寛政八年(1796)九月下旬に筆写し(寛政八辰年九月下旬_ニ書写之畢 桑門等観_{春秋十九才}), そして最後にそれを、享和元年(1800)の十二月下旬に、等淳が筆写したこと(享和元年十二月下旬_ニ以観師和上ノ御本紙書写之畢 写誤多数後毘勿此本紙_{スルコト}求寂等淳)が明記されているのである。では、その八篇すべてが學如の著作であるかと言えば、その点に関しては必ずしも定かではない。八つのテキストのうち、冒頭や末尾に撰者名ないしは著者名としての「學如」の名前が見られるものは、「下」に含まれた三つのテキスト、すなわち「恭答龜龍之常塔上人」「戒名義」「異部大綱」の三者のみであって、「上」の五つのテキストに関しては、必ずしも、それらが誰に帰するものであるかは明記されていない(なお「尼師但那」に関しては、その末尾に『十誦律』の波逸提法第89条「過量坐具戒」の因縁譚のおおよそ全文が見られるが、それは「右加筆桑門密乗謹識」というように、密乗なる僧侶による加筆であることが明記されている)。そのため、「下」に収められている三つのテキストについては、その撰者ないしは著者を學如とみなしても問題はなさそうであるが、「上」の五つに関しては、にわかにはそのようなものと結論づけ難い。したがって、現時点では、福王寺が所蔵する『小部類集』に含まれている八つの小篇テキスト全てを學如の著作とみなすことは必ずしも妥当ではないと言えよう。また、先に言及した「上」の裏表紙の裏側に見られる「右以上 四箇之目錄雖各別以今略為一本矣」という書き込みに注目すると、おそらくそれは「五部罪名」「四律大科」「尼師但那」「有部律名目」という四つのテキストと「律藏目錄」が(あるいは、その五つともが)本来別々に伝わっていたものの、便宜上一つにまとめられたことを意味していると思われる。さらに言えば、この

『小部類集』全体を総じたような學如自身の序文や後書きは、「上」にも「下」にも確認されない。これらの点を勘案すると、八つのテキストを「小部類集」という名のもとにまとめあげたのは必ずしも學如自身であるとは断じ難く、むしろ彼と同時代ないしは彼よりも後代の者が集成した可能性も十分に考えられる。

2) 「律藏目錄」について

福王寺が所蔵する『小部類集』の中の「律藏目錄」(全4丁)は、そのタイトルからも察せられる通り、主として律文献の列举(名称と巻数)——厳密に言うと「律」以外のテキストも挙げられている——をその内容としており、所々に短い解説も付せられている。概要を言えば、冒頭より、義浄訳の「根本説一切有部律」系のテキストが列举され、2丁目の半ばからは「次挙餘家律部」という文言とともに、説一切有部以外の部派が伝持したとされる律関係のテキストの列举が始まる。そして3丁目の半ばからは、『四分律』の注釈書の列举が始まり、それが4丁目の半ばの「已上廿三部悉四分律家」という文言で締め括られている。つまりは、「律藏目錄」の全体は、その内容から、(1) 真言宗僧が伝持すべき「説一切有部」の律にかかわるテキストの列举(1丁目～2丁目半ば)、(2) 他の部派の律テキストの列举(2丁目半ば～3丁目右)、そして(3) 特に『四分律』を奉じる者たちにかかわる、中国で撰述された『四分律』の注釈テキストの列举(3丁目左～4丁目右)というように三つに大別される。

これらの三者の中でも特に(1)と(2)からは、この目録を作成・伝持した近世後期の真言僧たちの律に関する知見に関して、断片的ではあるものの、さまざまに興味深いことが窺い知られる。例えば、(1)において、テキストの配列が、義浄訳の「根本説一切有部律」系のテキストから始まることは、彼らが「根本説一切有

部律」を重視していたことを如実に物語っていると言えるが、「根本説一切有部律」だけではなく『説罪要行法』^{せつざいようぎょうほう}、『受用三水要行法』^{じゅうようさんすいようぎょうほう}、『護命放生軌儀法』^{ごみょうほうじょうきぎほう}という義浄が撰じた出家生活の作法に関わる三つのテキスト、および、彼の旅行記である『南海寄帰内法伝』^{なんかいききないほうでん}も挙げられている点は興味深い（無論それらは空海の『三学録』には挙げられていない）。學如ら「根本説一切有部律」の信奉者たちにとっては、同律と同様に、義浄その人の律に関わる著作も重要であったことが窺い知られるのである。また、この義浄の手掛けたテキスト群の列举において、勝友（*Skt. Viśeṣa-mitra）の撰じた『根本薩婆多部律攝』^{こんぽんさつぱたふりつしょう}（Skt. Vinaya-saṃgraha）が第二番目に挙げられている点も注目値する。というのも、それは、彼らが「根本説一切有部律」の綱要書である同テキストを重視していたことを示唆しているからである。実際、それは學如自身の手により校訂され、高野山内の書店より出版され、その後も真言宗内で伝統的に学習されたことが知られている²⁰⁾。さらに言えば、同テキストはチベット語訳でも現存するものの、それはチベット語仏典文化圏では——特に大学者プトン（1290-1364）がその正統性を明確に否定してからは——ほとんど顧みられなかったことが知られている²¹⁾。これらの点を勘案すると、この目録において『根本薩婆多部律攝』が様々な「根本説一切有部律」の律テキストに先駆けて列举されていることは、同テキストに対する漢語仏典文化圏とチベット語仏典文化圏における対照的な扱いを垣間見せているとも言えるのかもしれない。あるいはまた、(1)と(2)においては「根本説一切有部律」をはじめとするいくつかの律テキストの略号も明記されており、そこで『根本説一切有部百一羯磨』^{ひゃくいちこんま}を「羊石」とする略称が見られることや、あるいは「広律」という専門的な用語が、明らかに「根本説一切有部毘奈耶」^{びなや}を指す言葉として用いら

れていることも注目に値する。というのも、「羊石」という略称は、近世以前からの伝統的な略称の一つではあるが²²⁾、それほど広く知られたものでもなく、また「広律」に関しては、既に別稿でも指摘した通り²³⁾、ここでの語法は、現代の研究者の多くが自明のものとして広く用いる語法とは異なるものだからである。

また(2)に見られるテキストの帰属部派についての解説も興味深い。例えば『善見律毘婆沙』^{ぜんけんりつびばしや}は、19世紀後半に、近代仏教学の開拓者の一人として名高い高楠順次郎（1866-1945）が、それをパーリ語で現存する「パーリ律」（現在もスリランカや東南アジア諸国の僧団によって伝統的に依拠されている律）の注釈書である『サマンタ・パーサーディカー』（Samanta-pāsādikā）の漢訳ヴァージョン（抄訳）であることを指摘し、後に長井真琴（1881-1970）がさらに詳しく論証したことが知られているが²⁴⁾、この「律蔵目録」からは、未だパーリ仏典の存在を知らない近世後期の学僧たちが、既にそれを『四分律』や『十誦律』と関わるものとみなす見解に対して、それを手放しで同意しているわけではないことが窺い知られる（釈二分_[-]乎_[-]「此義未甘心」）。また『鼻奈耶』についても、近代仏教学の成果により、それが内容的にも『十誦律』との関連性・類似性が極めて高いテキストであることが広く知られるところとなっているが²⁵⁾、この「律蔵目録」からは、近世後期の学僧たちが早くもその可能性を探っていたことが窺い知られる（「道安法師謂_下是同_上十誦_[-]乎_上」）。なおこの釈道安^{しゃくどうあん}の見解が、具体的に何を指しているかは明記されていないが、おそらく釈道安の「鼻奈耶序」に見られる「往年曇摩侍の出せる戒典と相似し」という一節であろう²⁶⁾。曇摩侍は『十誦律』系の「比丘戒本一卷」[現存せず]を誦出した人物として知られている²⁷⁾。これらの二つのテキストの帰属部派についての解説は、近代仏教学の成果

と軌を一にするものと言える。一方で、彼ら近世後期の学僧たちは、現代の仏教学のそれとは異なる見解も提示している。それは『摩訶僧祇律』、『優波離問仏經』(「律藏目録」においては『優波離問經』と記されている)、『毘尼母經』の帰属部派についての見解である。

『摩訶僧祇律』は、近代仏教学においては、大衆部(Skt. mahāsāṃghika)が伝持した律であることが——主としてその「摩訶僧祇」という音写語(*Skt. mahāsāṃghi[ka])によって——全く自明のものとされているが、この「律藏目録」では、どういうわけか所属部派が「未決定」とされている(此律部宗未_レ決定_一)。また『優波離問仏經』に対しては、それが内容的にも「根本説一切有部律」と一致し(此_レ經所_レ説戒相全_一同_一根本有部_一)、また勝友の『根本薩婆多部律攝』においても言及がなされているにもかかわらず(勝友尊者律撰_一中_一引用)、「古師」たちが説一切有部のものと認めていないことが疑問視されているが(未_レ聞_一古師言_一是有部經_一)、近年の「根本説一切有部律」研究の進展により、勝友の『根本薩婆多部律攝』で言及されているのは、「根本説一切有部律」のチベット語訳でのみ現存する「ウパーリ問答」であること²⁸⁾、そしてまたそのチベット語訳で現存する「ウパーリ問答」は『優波離問仏經』とは構造的に異なるものであることが指摘されている²⁹⁾。また『毘尼母經』は、近代仏教学においては古くより『四分律』との関わりが深いテキストであることが繰り返し指摘されているが³⁰⁾、この「律藏目録」では『四分律』だけでなく『摩訶僧祇律』との関連性も示唆されている(「近僧祇四分」)。

これらの『摩訶僧祇律』、『優波離問仏經』、『毘尼母經』の帰属部派に関する「律藏目録」の解説は、現代の仏教学界における定説とは必ずしも一致するものではない。しかしながら、だからと言って、それらを単に情報が不十分な時代

における誤った古い認識として一顧だにしないのは、先に見た『善見律毘婆沙』と『鼻奈耶』についての解説が示唆する彼ら近世後期の学僧たちの見識の高さに鑑ると、必ずしも適当ではないであろう。それらはむしろ新たな知見を生み出すきっかけとして吟味する必要があるのかもしれない。実際、この「律藏目録」においては、『十誦律』と「根本説一切有部律」の関係という近代仏教学の一大トピックについても、傾聴に値する重要な見解が提示されている。最後にこの点について言及しておこう。

近代仏教学においては、古代インドにおける各部派は、それぞれ固有の律を伝持し、そこに説かれた規定を守ること部派のアイデンティティを保っていたとする見解が支配的である³¹⁾。そのため、同じ説一切有部という部派に帰される異なる二つの律——『十誦律』と「根本説一切有部律」——が現在にまで伝わることに關して今なお議論がなされている³²⁾。このことを踏まえて、この「律藏目録」の(2)の部分を見ると、そこでは『十誦律』と「根本説一切有部律」の関係性が、一定の合理性をもって明快に提示されていることが分かる。すなわち、兩律が同じ「説一切有部」の律という枠組みで捉えられており、そして『十誦律』およびそれに関連する『薩婆多毘尼毘婆沙』、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』、『毘尼母經』(ただし、この『毘尼母經』については、「後_一本无_一此三字_一」)というように、それが『十誦律』を解説したものという見解が後代のものであることも示唆されている)が、内容的に「根本説一切有部律」に「相同」し、そのため補助的に用いるべきものとして解され、かつ、それらの『十誦律』系テキストを伝持した説一切有部が「末家」とみなされている。要は「根本説一切有部律」およびそれを伝持したグループと『十誦律』およびそれを伝持したグループは、同じ「説一切有部」という枠組みの中に収まりつつも、前者がその主流

(本家)であって、後者が傍流(「末家」)であると捉えられているのである。どちらが「本」であり「末」であるかという点はともかく——近代仏教学においては、どちらかと言えば『十誦律』の方が、翻訳年代が古いために主流とみなされているような印象を受ける——このように両者を同じ「説一切有部」という大きな枠組みの中で捉えつつ区別する見解は、現在の仏教学界においても一般的なものであると言える。そしてさらに注目すべきは、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』に付せられた「本末に通じる」という一節である。というのも、これは、同テキストが「根本説一切有部律」と『十誦律』の両者に通じていることを看破しているものに他ならないからである。近代仏教学においては、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』は、かねてより『十誦律』とのみ関連するテキストとして捉えられており、ここ十年ほどの間になってようやくそれが「根本説一切有部律」とも密接に関わることが指摘され始めている³³⁾。これらのことに鑑みても、彼ら近世後期の学僧たちは、時に近代仏教学の成果を先取りしたような精度の高い見解を示していると言える。

小結

以上、福王寺に所蔵されている『小部類集』の中に収められている「律蔵目録」について、その全貌を提示するとともに、そこに記載されている情報から、近世後期の学僧たちの律理解ないしは「根本説一切有部律」理解に関する若干の考察を試みた。そこからは、彼らが近代仏教学の研究成果にも負けず劣らずの精度の高い見識を有していることが窺い知れた。このことは、現代の仏教研究者に、漢語文献に基づいて構築されてきた伝統的な日本の仏教研究の成果を、前時代的な理解の浅いものとして軽視す

るのではなく、むしろ貴重な先行研究の一つとして丹念に参照することを要請していると言えるのかもしれない。

【謝辞】

本稿は、科学研究費助成事業・若手研究(18K12204)および2021年度「四大学連携研究支援」に基づく研究成果の一部である。それらにより福王寺における資料調査が実現し、かつその成果の一部をこうして形にできたことに感謝申し上げる。また度重なる調査や本稿における資料の提示を快諾して下さいった福王寺住職の亀尾祥宏師にも深謝し申し上げる。そして本稿の原稿に目を通し、貴重なコメントを下さった八尾史先生(駒沢大学)、Shayne Clarke先生(Mcmaster大学)、査読者の先生(京都薬科大学)にも心より感謝申し上げる(むろん、本稿に誤りや不正確な記述がある場合、それらが筆者一人の責に帰すことは言うまでもない)。

【引用文献】

- 1) 馬場紀寿『上座部仏教の思想形成』(春秋社:東京) 2008: 3-4.
- 2) 佐々木閑『出家とは何か』(大蔵出版:東京) 1999.
- 3) 水野弘元『仏教要語の基礎知識』(春秋社:東京) 1972: 56-60.
- 4) 石田瑞麿『鑑真:その戒律思想』(大蔵出版:東京) 1974: 46-68.
- 5) 佐藤達玄『中国仏教における戒律の研究』(木耳社:東京) 1986, 8-37.
- 6) 平川彰「四分律宗の出現と十誦律」『南都仏教』1986, 56: 1-20.
- 7) 宮林昭彦・加藤栄司『現代語訳 南海寄帰内法伝:七世紀インド仏教僧伽の日常生活』(法蔵館:京都) 2004.
- 8) 大谷由香「義浄による有部律典の翻訳とその影響について」『佛教学研究』2015, 71: 147-163.
- 9) 平田昌司「唐代小説史における根本説一切有部律」『中國文學報』1995, 50: 44-54.
- 10) Clarke, Shayne. "Miscellaneous Musings on Mūlasarvāstivāda Monks: The Mūlasarvāstivāda Vinaya Revival in Tokugawa Japan." *Japanese Journal of Religious Studies* 2006, 33(1): 1-49.
- 11) 『新纂浄土宗大辞典』(浄土宗出版:京都) 2016:

- 348 (s.v. きんだいぶつしょうがく【近代仏教学】).
- 12) 上田天瑞『戒律の思想と歴史』(密教文化研究所: 和歌山) 1976: 86–110, 313–342.
- 13) 浅井證善『真言宗の清規』(高野山出版社: 和歌山) 2003: 358–363.
- 14) 下野岩太『福王寺散策 (上)』(可部プリント社: 広島) 1987: 3–6.
- 15) 稲谷裕宣『安芸福王寺と学如和尚 (二): 学如の著作について』『安芸福王寺と学如和尚 (三): 学如の著作について』『高野山時報』1987, 2483: 4–5, 2484: 2–3.
- 16) 佐竹隆信『学如撰『真言八祖有部受戒問答』〈紹介と翻刻〉』『智山学報』2016, 65: 553–602.
- 17) 徳田明本『律宗文献目録』(百華苑: 京都) 1974: 139.
- 18) 小野玄妙編『佛書解説大辞典 第五卷 (シ)』(大東出版社: 東京) 1933: 294b.
- 19) 『國書總目録 第四卷 (し)』(岩波書店: 東京) 1966: 487d.
- 20) 岸野良治「學如 (1716–73) の編纂した義浄訳『根本薩婆多部律攝』に付せられた密門 (1719–88) の序文と、そこに加えられた書き込みについて」『西山禪林学報』2022, 33: 1–130.
- 21) Kishino Ryōji. “The Implications of Bu ston’s (1290–1364) Doubts about the Authenticity of the Vinaya-saṃgraha.” *The Memoirs of the Toyo Bunko* 2019, 77: 107–135.
- 22) 箕輪顕量「中世の手書き写本の OCR 翻刻テスト報告」下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方: 仏教学から提起する次世代人文学のモデル』(文学通信: 東京) 2019: 263–273, esp. 270.
- 23) Kishino Ryōji 「From Gyōnen 凝然 to Hirakawa Akira 平川彰: a cursory survey of the history of Japanese Vinaya studies with a focus on the term *kōritsu* 広律」『佛教大学仏教学会紀要』2018, 23: 85–118.
- 24) 平川彰『律蔵の研究』(春秋社: 東京) 1960: 67, 261.
- 25) 奥村浩基「『鼻奈耶』と『十誦律』」『パーリ仏教文化学』2000, 14: 69–77.
- 26) 宇井伯寿『釋道安研究』(岩波書店: 東京) 1956: 110–114.
- 27) 矢吹慶輝「建初元年寫熾煌出土十誦比丘戒本に就いて」『大正大學々報』1930, 6/7: 331–356.
- 28) Clarke, Shayne 「The ‘*Dul bar byed pa* (*Vinītaka*) Case-Law Section of the *Mūlasarvāstivādin Uttara-grantha*: Sources for Gunaprabha’s *Vinayasūtra* and Indian Buddhist Attitudes towards Sex and Sexuality」『国際仏教学大学院大学研究紀要』2016, 20: 49–196, esp. 55.
- 29) 岸野亮示「二つの『ウッタラグラント』: 二つの「ウパーリ問答」」京都大学大学院文学研究科修士論文 2006: 14–15, n. 32.
- 30) 佐々木閑『インド仏教変移論: なぜ仏教は多様化したのか』(大蔵出版: 東京) 2000: 368.
- 31) 末本文美士『浄土思想論』(春秋社: 東京) 2013: 88.
- 32) Bhikkhu Anālayo. “‘*Mūlasarvāstivādin and Sarvāstivādin*’: Oral Transmission Lineages of Āgama Texts.” *Research on the Saṃyukta-āgama*. (Taipei: Dharma Drum Publishing) 2020: 387–426.
- 33) 岸野亮示「『薩婆多部毘尼摩得勒伽部』は『十誦律』の注釈書か?」『印度學佛教學研究』2008, 56(2): 854–851.

凡例

【資料一】「律蔵目録」の翻刻

一、漢字の表記は、異体字も含めて出来る限り写本に記されたものを再現したが、筆者のコンピュータで表記できない文字については、常用漢字を用いている。

一、送り仮名の表記も出来る限り写本に記されたものを再現したが、漢字の略体を用いたものなど（例えば「為」の略体を用いた「シテ」など）は、カタカナに変換して表記している。

一、テキスト名に付された解説の行数に関しても、出来る限り写本に記されたものを再現したが、必ずしもその通りになっていない箇所もある。

一、表記された文字の大きさも、出来る限り記載されている文字に応じてサイズを変更しているが、必ずしも正確な変更がなされているわけではない。

【一右】

- 廣律 抄書三 根本説一切有部毘奈耶 五十卷
- 律攝 抄書三 根本薩婆多部律撰 十四卷
- 尼律 根本説一切有部毘奈耶 廿卷
- 雜事 抄書三 根本説一切有部雜事 四十卷
- 破僧事 抄書三 根本説一切有部破僧事 十卷
- 目得迦 抄書三 根本説一切有部目得迦 五卷
- 尼陀那 抄書三 根本説一切有部尼陀那 五卷
- 藥事 根本説一切有部藥事 十八卷 元并卷
- 夏事 根本説一切有部安居事 一卷 十一卷
- 皮事 根本説一切有部皮革事 一卷

【一左】

- 那衣事 根本説一切有部羯恥那衣事 一卷
- 意事 根本説一切有部隨意事 一卷
- 家事 根本説一切有部出家事 四卷 欠二卷
- 羊石 根本説一切有部百一羯磨 十卷
- 說罪要行法
- 受用三水要行法
- 護命放生軌儀法
- 根本説一切有部毘奈耶頌 五卷
- 根本説一切有部雜事撰頌 一卷
- 根本説一切有部尼陀那目得迦撰頌 一卷
- 根本説一切有部毘奈耶戒經 一卷
- 根本説一切有部毘奈耶戒經 一卷
- 奇傳 南海寄飯内法傳 四卷
- 右二十三部根本有部所用義淨三藏訳也其餘
- 有「根本説一切有部薩婆都七十八卷」未シテ及ニ再治ニ
- 三藏入滅今墜没ス
- 十餘四分傳紙五分
- 母論多論伽論
- 舊律師是「三十四律五論」
- 多論 薩婆多毘尼毘婆娑 九卷 新十卷
- 伽論 薩婆多部毘尼摩得勒伽論 十卷 新十卷
- 是「集義論通」本末

○母論

毘尼母論 八卷 毘尼母論 八卷 毘尼母論 八卷

○十誦

十誦律 六十一卷

【二左】

已上四部有部之末類ニシテ雖非根本有部ニ大ニ歸相同シ

故為助 或用^成ユ

本末合シテ并七部此内高祖入ニ學録ニ者以ニ朱点マシ示レ之
高祖既以ニ末家ノ多論入ニ本所學ニ則准列ノ之ニ餘應レ學
者隨テ應撰入ス

次ニ奉ムニ餘家律部^一

○四分

四分律 六十卷 法華部

○僧祇

僧祇律 四十卷 毘尼母論ニ入ル

○五分

五分律 三十卷 化地部

○善見

善見毗婆娑律 十八卷 毘尼母論ニ入ル

【三右】

○了論

律升二明了論 一卷 戒正部

○五百問

佛說目蓮問戒律中五百經重事經 三卷

○威儀

大比丘三千威儀 二卷

○因緣經

戒因緣經 一卷 又云毘尼母論ニ入ル

○身子問

舍利弗問經 二卷

○鄒波離問

優波離問經 一卷 此經所記諸問皆毘尼母論ニ入ル

○迦葉禁戒經

優婆塞五戒相經

○戒消災經

「戒」は誤記であり「戒」と読むべきであることを示唆しているであろう。

Cf. 「三論玄義」(T. 1832 [45] 10b13c) 三枝充應「三論玄義」(東京：大藏出版) 1971.
192-196: 「普賢律師子願要十誦律」

Cf. 釈道安「鼻奈耶序」(T. 1463 [34] 85a) 「與往年曇摩寺出戒曲相似。如合符焉」

○佛間毘曇經

解脫戒本經 解脫戒本經 八卷

○經律異相 五十卷

【三左】

四分律疏 升卷 智前 首

同開宗記 十卷 懷素

行事抄 十二卷 道宣

鈔批 十四卷 大覺

簡正記 三十三卷會正記 十二卷 其書又

戒疏 八卷 道宣

發揮記 八卷

業疏 八卷 道宣

正源記 八卷 允堪

【四右】

比丘尼鈔 六卷 道宣

輔要記 六卷 允堪

已上并三部悉四分律家

律ノ三大部^一

四分律家三家 南山道宣

相部法藏

東塔懷素

「前」は誤記であり「智首」と読むべきであることを示唆しているであろう。

写本では「^一」ではなく「^二」

写本では「^一」ではなく「^二」

